

反ナショナリ

—透谷と

5月29日(土) PM 1:00 学館練習室

私たちの内に巣くって動めく流動体が近代に接するとき、私たちはその深淵に落とし込まれていくのを感じる。私たちがその流動体を抽出していこうとすると、私たちの営為はおのずと過去のナショナルな思想の系譜を辿っていくことを強いるのである。何故ならば、過去のナショナルな思想の系譜こそが、内に動めく流動体をその原形から浮びあがらせる契機を私たちに与えてくれるからである。私たちが今、北村透谷の思想的営為を眺めるとき、外部注入による近代化という、日本の近代そのものの病弊に最後まで耐えぬいていった思想家の像が浮びあがってくる。そして透谷こそが明治維新以降の、それに耐えぬき斃れていった最初の思想家だったのである。

「戦士陣に臨みて敵に勝ち、凱歌を唱へて家に帰る時、朋友は祝して勝利と言ひ、批評家は評して事業といふ、事業は尊ぶべし、勝利は尊ぶべし、然れども高大なる戦士は、斯の如く勝利を携へて帰らざることあるなり、彼の一生は勝利を目的として戦はず、別に大に企図するところあり、空を撃ち虚を狙ひ、空の空なる事業をなして、戦争の中途に何れへか去ることを常とするものあるなり。」

透谷の終始抱きつけてきた苦闘は、私たちの前に明確なものを与えてはくれない。もしも透谷の苦闘が明確に打ち出されるならば、それはおそらく透谷の苦闘からはほど遠いものであろう。それほど透谷の苦闘は、私たちの前に取りとめがなく、漠としたものとして存在しているのである。にもかかわらず透谷の苦闘が私たちの内に響いてくるのは、透谷の苦闘そのものが、私たちの内に動めく流動体の覚醒剤として存在しているためではないだろうか。私たちが今、即答を出そうとは思わない。それにはあまりにも私たちは虚弱であるからだ。

透谷がその内にかかえ持った苦痛を必死に出しつけようと七転八倒する姿は、愛山との論争において、その度を増していく。単に「人生相渉論争」あるいは「政治と文学論争」としてかたづけることのできない透谷と愛山の論争は、透谷が生産しつけてきた悲痛

ズムの源流

愛山—

講演 北川 透

の叫びを、その真正面から浮彫りさせたのである。「文章即ち事業なり」と云った愛山に対して透谷は「大丈夫の一世に立つや、必らず一の抱く所なくんばあらず、然れども抱く所のもの、必らずしも見るべき功績を建立するにはあらず。建築家の役々として其業に従ふや、幾多の歳月を費して後、確かに巍乎たる樓閣を起すの算あり。然れども人間の靈魂を建築せんとするの技師に至りては、其費やすところの労力は直ちに有形の樓閣となりて、ニコライの高塔の如く衆目を引くべきにあらず。衆目衆耳の聳動することなき事業にして、或は大に世界を震ふことあるなり。」と云って純文学を擁護していった。確かに表象的には「人理相渉論争」であり「政治と文学論争」であった。しかし愛山という全く位相の異った人物が透谷の前に現われたことによって、透谷の営為が漠としつつもその頭角を現わしてきたのである。そして透谷の言葉がつねに愛山と位相の異った地点から発せられていることを知っていたということにおいても、はるかに愛山よりも先取りしていた。私たちは、透谷の悲痛の叫びに、愛山の論理よりも、はるかに虚界のなかに揺らめいている清涼宮を捕握するほどの勢いを感じるのである。透谷の奮然たる反撃は、自由民権運動の離脱以来、透谷が自らの重荷として背負ってきた漠とした疑惑を一度に爆発させ、自らの営為を「空の空の空を撃ちて、星にまで達せんと」するものとして鮮明に出しえなかったが故に、理論展開において当時群を抜いていた愛山に表面的には敗北せざるをえなかったのである。

私たちが透谷の思想を辿っていくとき、透谷が自らの内に培い育てていった思想が現実と接するとき、深い淵に落とし込まれていくのを感じつつも最後までそれに耐えぬき斃れていった、雄大な戦士の像が、私たちの眼から去ることを止まないものである。

「頭をもたげよ、而して視よ、耐して求めよ、高遠なる虚界を以て、真に広闊なる家屋、真に快美なる境地、真に雄大なる事業を視よ、而して求めよ、爾の Longing を空際へ投げよ、空際より、爾が人間に為すべきの天職を捉り来れ。」